

# 小学校音楽学習指導要領の理念「思いや意図をもって」をどう捉えるか

— 小学校教員対象の研修（神奈川県立総合教育センター主催） —

中 嶋 俊 夫

## How to Approach to "Have Your Feel, Have Your Thought", a Principal Guideline of the National Curriculum for Music at Elementary Schools

— One Specific Method Suggested by the Author, at a Teachers' Training Session Organized by the Kanagawa Prefectural Education Center —

Toshio Nakajima

### はじめに

平成 20 年 1 月、中央教育審議会答申において音楽科の改善の基本方針が示された。その中で「思いや意図をもって表現したり味わって聴いたりする力を育成すること」と述べられている。この「思いや意図をもって表現したり…」はこれまでの学習指導要領にはなかった文言であり、その意味で新しい学習指導要領を方向付けるキーワードとして注目されるが、これを音楽の表現活動や学習においてどう展開していくべきであろうか。

ところで、従来から教科書の頁には「情景や様子を思い浮かべて」「詩の内容を感じ取って」といった学習活動が示され、音楽作品から受けるイメージや感覚、さらに解釈による意味内容を表現へと生かすよう求められてきた。このような解釈・表現へのアプローチは、音楽科の指導内容を特徴づけるものであるが、この特質は同時に、教師は児童生徒がイメージしたり、感じ取ったりしたことをどのように把握し、表現へと展開できるのかという課題を担っている。これに対して、前述の音楽科の改善の基本方針に示されている「思いや意図をもって表現する」は、指針を与えると考えられるだろう。本研究の目的は、小学校音楽科において、この「思いや意図をもって」の理念を実践展開するための方法論を導き出すことである。

本論では、筆者が講師を務めた神奈川県立総合教育センター主催による小学校教員対象の研修<確かな学力をはぐくむ教科指導研修講座 6 小学校音楽>（平成 22 年 7 月 29 日開催）の中で、「思いや意図をもって表現するについて考える」と題して行った活動を基に考察を進める。この研修会の内容は、筆者が研究テーマとして取り組んできた「音楽的体験を共有する場づくり」と「イタリアの舞台表現教育」から示唆を得て計画されたものであることを付け加えておく。

## I 「思いや意図をもって表現する」の理念

### 1. 音楽科改訂の趣旨における「思いや意図をもって表現する」

前述のように、平成 20 年 1 月の中央教育審議会答申で音楽科の改善の基本方針が示されたが、その概略は下記のようにまとめられよう。

- ・ 音楽のよさや楽しさを感じるとともに、思いや意図をもって表現したり味わって聴いたりする力を育成

する。

- ・音楽と生活とのかかわりに関心をもって、生涯にわたり音楽文化に親しむ態度をはぐくむ。
- ・音や音楽を知覚し、そのよさや特質を感じ取り、思考・判断する力の育成を重視する。
- ・創作活動は、音楽をつくる楽しさを体験させる観点から、小学校では「音楽づくり」、中・高等学校では「創作」として示す。
- ・鑑賞活動は、音楽の面白さやよさ、美しさを感じ取ることができるようにするとともに、根拠をもって自分なりに批評することのできるような力の育成を図る。
- ・我が国や郷土の伝統音楽に対する理解を基盤として、我が国の音楽文化に愛着をもつとともに他国の音楽文化を尊重する態度等を養う。

この基本方針の理念は、子どもたちが音楽のよさや美しさを感じ取り、音楽と生活とのかかわりに関心をもって生涯にわたって音楽文化に親しむこと、つまり子どもと音楽との継続的・発展的な関わりを大切にすることである。そしてその中核にあって求められているのが、次の3つの力の育成であると考えられる。

- ①思いや意図をもって表現したり味わって聴いたりする力
- ②思考・判断する力
- ③根拠をもって自分なりに批評することのできるような力

①については本論の研究テーマであるが、まず一人一人が音楽と関わるときにただ漠然と歌ったり、聴いたりするのではなく、それらの活動を通してどのようなことを感じ、積極的に関わろうとしているかを問うものである。②については音・音楽を知覚し、認知した内容を、知識や技能と関連を図りながら学習を進展させることができる力である。そして③については、鑑賞活動に限定されているが、表現活動も含めて音楽の学習全般にわたって有効に活用される言語活動の力であると筆者は捉える。この3つの力は相互に関連するものであり、①の「思いや意図」は②と③の力の基礎として位置づけられるのではないかと考えられる。つまり音楽の体験的活動にともなって「思いや意図」をもつことは、継続的な学習を通して考える力につながり、また「思いや意図」は言語的活動の側面ともつながっていると考えられるからである。この背景には、「基礎的・基本的な知識・技能の習得」「思考力・判断力・表現力」といった答申全体の理念があることは周知の通りである。

## 2. 小学校学習指導要領における「思いや意図をもって表現する」

先の中央教育審議会答申を受けて、平成20年3月に新しい小学校学習指導要領が告示された。下記にまず教科の目標を示し、それから〔第3学年及び第4学年〕を例に、表現領域3分野（歌唱、器楽、音楽づくり）の「思いや意図」と関わる部分を抜粋する。

### 小学校学習指導要領 第2章 第6節 音楽

#### 第1 目標

表現及び鑑賞の活動を通して、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育てるとともに、音楽活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う。

#### 第2 各学年の目標及び内容 2 内容 A 表現

〔第3学年及び第4学年〕

(歌唱)

歌詞の内容、曲想にふさわしい表現を工夫し、思いや意図をもって歌うこと。

(器楽)

曲想にふさわしい表現を工夫し、思いや意図をもって演奏すること。

(音楽づくり)

音を音楽に構成する過程を大切にしながら、音楽の仕組みを生かし、思いや意図をもって音楽をつくること。  
(下線は筆者)

教科の目標は平成10年告示の学習指導要領と一字一句同じであり、「音楽を愛好する心情」「音楽に対する感性」「基礎的な能力」(あるいは「基礎」)の3本柱は、戦後の学習指導要領の変遷において継続的に重視されてきた。

この3本柱について学習指導要領の解説に範を求めると、次のような表現で捉えられている。<sup>1</sup>

(筆者抜粋・要約)

ア 音楽を愛好する心情

- －児童が楽しく音楽に関わり、音楽を学習する喜びを得るようにする。
- －表現及び鑑賞の様々な活動を通して、活動そのものを楽しんだり、音楽に感動したりする。
- －体験を通して音楽のよさや面白さ、美しさに気付き、音楽活動への興味・関心を膨らませる。
- －友達と関わり合いながら、主体的に音楽を学ぶ喜びを味わう。

イ 音楽に対する感性

- －美しいものに感動するといった柔らかな感性。
- －音楽的な刺激に対する反応、すなわち、音楽的感受性。具体的にはリズム感、旋律感、和声感、強弱感、音色感など。
- －音楽的感受性は、音楽を豊かに感じ取り、想像力を伸ばし、音楽美を感得する上で重要な働きをもつ。

ウ 音楽活動の基礎的な能力

- －表現及び鑑賞の活動に必要な能力。
- －生涯にわたり児童が楽しく音楽と関わっていくことができるために求められる能力。
- －児童が感じたことや心に描いたことを、音楽を通して表現する能力。
- －音楽のよさや面白さ、美しさを感じ取りながら、想像力を働かせて聴くことができる能力。

上記によると、「愛好する心情」「感性」「基礎的な能力」の3本柱は、児童が興味をもって音楽活動することにより相乗的に養われるが、その学習活動を支えるのは、主体である児童が「何をどう感じるのか」という情意的な面であり、このことがつまり「思いや意図をもって」の意味であると解釈する。

学習指導要領では、教科の目標に続いて指導内容が低・中・高学年に分けて記されている。文言は多少異なるものの内容は共通しているため、ここでは〔第3学年及び第4学年〕の部分为例示した。

このように表現領域である「歌唱」「器楽」「音楽づくり」の学習活動において、「思いや意図をもって」位置付けられ、児童が、歌詞の内容や曲想、音楽の形式や構成要素を生かして表現するとき、そのプロセスにおいて「思いや意図」がともなうよう指導することが求められている。しかしそれを実践へと展開するとき、教師は「思いや意図をもって」の趣旨は理解しても、方法論をどう見出せばよいのだろうか。

## Ⅱ 小学校教員対象の研修 — 「思いや意図をもって表現する」について考える —

研修会名称：平成 22 年「確かな学力をはぐくむ教科指導研修講座 6 小学校音楽」  
 主催：神奈川県立総合教育センター  
 日時：平成 22 年 7 月 29 日（木）9：00～16：30  
 場所：神奈川県立総合教育センター 善行庁舎 音楽科研修室  
 担当講師：中嶋 俊夫（横浜国立大学教育人間科学部准教授）  
 参加者：神奈川県小学校教員 25 名

### 1. 研修講座要項（筆者作成）

#### （1）研修課題

「思いや意図をもって表現する」について考える

（「確かな学力をはぐくむ音楽科の指導」「確かな学力をはぐくむ教材と指導の工夫」をふまえて）

#### （2）課題設定の趣旨

平成 20 年 3 月告示の小学校の新学習指導要領〈音楽〉では、「思いや意図をもって」歌い、演奏し、音楽をつくることが求められています。また教科書においては従来から、「情景を思いうかべて」「詩の内容を感じとって」というように、意味内容が表現に生かされるよう示されてきました。そこで実際に児童が感じとったこと、イメージしたことが、思いや意図を通してどのような方法でどう表現されるのか、その関連性を理解するために今回の研修では、「身体」と「音・音楽」の 2 つの方向から表現活動を試み、「思いや意図」がどのようなアプローチによって表現へと実現するかを体験します。身体表現と対照することにより、音・音楽の表現の意図がより明確になることが目的です。これら実践と討議を通して課題を進めていきます。

#### （3）研修内容

##### ○討議 1：「思いや意図をもって表現する」をどう捉えるか

これまで児童と表現活動をした経験（音楽に限らない）から、参加者がこの課題をどのように捉えているかを伺います。あらかじめ話す内容をまとめておいてください。

##### ○表現実践：テーマを「身体」と「音・音楽」で表現する

グループに分かれて活動を進めます。それぞれのグループはテーマ（たとえば「森」）から感じたこと、思い描いたことを書き出し（言語化し）、それらを「身体」と「音・音楽」によって表現することを試みます。グループ分けは当日行います。

##### ○討議 2：「思いや意図をもって表現する」を学習活動においてどう展開するか

表現実践から学んだこと、それを子どもたちの学習にどう生かせるかを考えていきます。

#### （4）準備するもの

- ①身体表現にともなって活用できるもの：リボン、布切れ、ビニールシート、風船、ボール、バトンなど、携行できるものを 1 つか 2 つ。
- ②音の出るもの・楽器など：携行できるものを 1 つか 2 つ。  
 センターにある楽器も使用できますが、各自でも何か準備してください。必ずしも楽器である必要はありません。手づくり楽器、効果音が出せるものなども歓迎します。

※①と②とも現時点で表現内容を特定することができませんので、任意のもので結構です。

### (5) 服装

動きやすいもの（体操着である必要はありません）

## 研修当日の流れ

(午前9:00～12:00)

(1) 問題提起／討議1

(2) 歌唱活動を例に

(3) 鑑賞活動を例に

(午後1:00～4:30)

(4) 表現実践：「身体」と「音・音楽」による表現

(5) 討議2／まとめ

## 2. 研修内容（午前の部）

午前の部では3つの課題について研修を進めた。以下、考察を交えながらその内容を取り上げる。

### (1) 問題提起

小学校学習指導要領音楽（平成20年告示）の目標・内容と、「思いや意図をもって表現する」について課題を共有した後、次の討議に入った。

#### 討議1

これまでの児童との表現活動の経験（音楽に限らない）から「思いや意図をもって」をどのように捉えていますか。

この討議内容について、受講者には事前課題として記入用紙にそれぞれの考えを書いてきてもらった。その記述内容を以下①②③の観点から整理しながら、本研修における「思いや意図をもって」を方向付けたいと考える。

#### ① 「思いや意図」の解釈

- ・表現しようとするものに対してイメージを持ち、そのイメージを膨らませて自分なりに考えて表現すること。
- ・「こんなふうに表現したい」というイメージを持つこと。
- ・表現するテーマへのイメージを持ち、自分でそれに近づくために児童が持つ心情、感性、能力を相互に関連させることで思いや意図を持った表現活動へとつながる。
- ・自分のイメージをいかに相手に伝えられるかを意識しながら表現すること。
- ・伝えようとする相手に自分の思いを理解してもらおうと考え表現すること。伝えあおうとする心の動きが、表現活動へつながっていくのではないか。

（下線は筆者による。~~~~は「思い」に、\_\_\_\_\_は「意図」にあたると解釈する）

これら記述の特徴的なことは、「思いや意図」を25人中9人が「イメージ」というキーワードでとらえ

ているということである。この「イメージ」という語は概念としては共通に理解されているようで、それを規定するとなると複雑である。視覚や聴覚、触覚など感覚と関わっている場合、感情をともなう場合、具体的な情景や場面、想像したことなど、人間がそれまでの体験や記憶から様々な要素に起因して想起されるものであるが、それらイメージが「思いや意図」を導くと捉えられている。さらに「思い」を表現するとき、自分なりに考えたり、欲求をもったりすること、それが「意図」であるとこれらの記述から解釈される。そのことを明確にするために記述内容に下線を施し、「思い」にあたる部分<sup>~~~~</sup>と「意図」にあたる部分<sup>\_\_\_</sup>を区分してみた。これは筆者の見解でもあるが、「思い」は対象に向かった時に自然にわき起こる感覚や感情、想起されるものであり、それに対して「意図」は何かを表し、伝えるための思考であると捉える。

学習指導要領と同解説によると「思い」と「意図」は個々に示されることなく、つねに「思いや意図」というように一対になって表記されている。ただ一点、低・中・高学年の指導内容の記述を比較して推測できることがある。表現領域において3・4学年と5・6学年では共通して「思いや意図をもって」と記されている部分が、1・2学年では「思いをもって」としか記されておらず、「意図」という語が省かれている。つまり低学年の「思い」に中・高学年で「意図」が加わっていることになるが、このことから「意図をもって表現する」は、一段階上の学習活動として位置付けられていると解釈できる。指導を計画する上で、この「思い」と「意図」は個別化される必要があるだろう。

## ② 「思いや意図をもって表現する」を具体的にどう実践されているか

- ・曲を聴いて想像したことを言葉や体で表現する。
- ・まずは表現したいものをみつけさせ、自分なりに「こう表現したい」という風に考えたり、自分なりの想像や工夫をもって表現させられるようにしたい。
- ・子どもが「ここをこうしてみたい」という気持ちを大切にす。
- ・身体を動かしながら歌うよう指示すると、一人一人思うままに身体を動かしており、それぞれのイメージや表現の仕方の違いを感じることもある。
- ・相手に伝わるように表現すること。すべての日常生活において言葉はもちろん、表情や仕草、声色や身振り手振りを駆使して子どもは活動している。それらは何らかの意図があつてすることで、そのような活動すべてが表現活動だと思う。
- ・自分の思いを言葉にすることが苦手な子どもも、ジェスチャーや表情で表すことで自己表現できることがある。
- ・自分のイメージをいかに相手に伝えられるかを意識しながら表現することが必要。
- ・「思いや意図をもつ」ということは、場面や背景などを想像することから表現へつながっていくのではないか。
- ・イメージを確かなものにするために、まず言葉で表現する。それを全体で共有しながら、いろいろな意見を付け加えていくことでイメージを広げていく。そしてどういう表現が適切かを話し合う中で、自分の思いが確かなものになっていき、自分なりの表現ができるようになる。
- ・音楽の授業では共有することを大切にしている。鑑賞領域では、感じ取ったことを言葉で表すなどの活動を通して、「楽しい音楽」「悲しい音楽」「踊りだしたくなる音楽」など、感じた子どもが「なぜそのように感じたのか、音楽のどの部分から感じたのか」を明らかにしている。そうすることで音楽の本質に迫り、音楽のよさや特徴を感じ取ったり、楽器の音色の出し方の工夫など、表現につなげることができるのではないか。合唱などの集団活動においては、言語によるコミュニケーションが必要になる。表現したいイメージや思いを伝えあつたり、他者の思いや意図に共感したりすることで表現を工夫することにつながっている。

- ・歌う、踊る、ボディーパーカッション、ミュージカルなどの身体表現をするとき、いろいろな音楽に触れながら「きれいだな」「かっこいいな」「やってみよう」「どうしたら自分にもできるかな」と音楽に憧れをもたせる。
- ・音読発表会のときに、場面の情景や主人公の気持ちを読み取った上で、「この言葉はやさしい声で読む」「少しうつむきながら静かに読む」などの工夫をさせる。
- ・『モチモチの木』を学習したあと、登場人物の気持ちやまわりの情景を音で表現した。音読とつくった音楽、そして影絵で発表した。

これらの記述から、表現方法について音・音楽以外に言葉、音読、身体、演技による実例が示されている。そしてそれを支えているのが「場面や情景」「どんな気持ちで」といった解釈であり、それらを共有しながら、自分の考えを伝え、工夫して表現をつくっていくのである。

### ③ 「思いや意図をもって表現する」の指導の課題、難しさ

- ・音楽に限らず児童が「自分はこう表現したい」という思いをしっかりとって活動するためには、その題材（教材）についての理解が必要である。児童が理解するためにはいろいろな「気づき」が必要で、その「気づき」をどのように仕組んでいくかということが教師に課せられている。
- ・音読や劇に比べて、歌や音で自分の思いを表すことはすごく難しい。音楽に限らず、「自分で創る」「自分で自由にやってみよう」というのが苦手な子どももいて、そういう子どもに対してどう表現させるかはいつも課題である。
- ・担任をしている2年生では、まだ音楽や歌詞から思いや意図をもたせることが難しい（これまでの経験からか、音楽＝元気いっぱいというようなイメージがあるので）。意味をもたせるためには、音や歌詞について一つ一つ確認することが必要になるが、思いや意図を持たせたととしても、それを生かして表現するまでには至らない。子どもたちがその手段や方法を知り、練習することで達成できるのだろう。
- ・たとえば『虫の声』で、鳴き声の部分を楽器で表現する場合にも「思いや意図」を持たせていただろうか。曲によっては「誰かに伝えるように」などと指導を行ったことはあるが、果たしてそれだけで表現できただろうか。
- ・何らかの表現活動を進めるためには、児童の中にぼんやりとあるイメージをはっきりした形にしておくために話し合いが必要で、その話し合いをリードしていく言葉や、子どものイメージを膨らませる資料の提示等が大切である。
- ・2年生の国語『スイミー』の単元で、登場人物の気持ちや場面の様子を想像しながら読むという活動を行った時、場面ごとに気持ちを込めて読むよう意識させたが、指導方法がわからず不十分だった。

## (2) 歌唱活動を例に

歌唱を通して1)～3)の活動に取り組んだ。<sup>2</sup>

### 1) 「皆が参加する場づくり」から「声の多様な表現」へーコミュニケーションの働きを生かした活動ー

- |   |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>① 問いと答え（コール・アンド・レスポンス1）</li> <li>② 図形的表現を使って</li> <li>③ 身体表現を使って</li> <li>④ さまざまな事物や現象を声で表現する</li> </ul> |
|---|

- ⑤ 交互唱：模倣から表現へ（コール・アンド・レスポンス2）
- ⑥ 変化する題材の様子を表現する

取り上げた曲 ♪やまびごっこ（おうちやすゆき・詞／若月明人・曲）  
 ♪こぶたぬきつねこ（山本直純・詞曲）

コミュニケーションの働きを生かしたこれらの活動では、いろいろな問いかけに（例「すきながっこうぎょうじはなあに？」）一人一人が答えることからはじめた。声に出して答えていく中で、大げさなイントネーションや節をつけたりしながら表現の工夫につなげていった。また提示された図形を声で表わしたり、それに身体表現をとまなわせたり、様々な事物やその変化を声や歌声で表現するなどの活動に取り組んだ。ここで大切にされたことは、表現したい内容が意図したように伝わったかどうかを体験することである。

## 2) 「思いや意図をもって」歌う 1—曲想と表現技能の関連—

- ① 「なに」を「どう」表現するか
- ② 曲想に合った歌い方

取り上げた曲 ♪トスティ 50 番から No.8 (Tosti, 50 Solfeggi) ♪歌のにじ（佐田和夫・詞／岡部栄彦・曲） ♪ゆかいに歩けば（保富康午・詞／メラー・曲） ♪あたらしいえがお（安西薫・詞／長谷部匡俊・曲） ♪ふじ山（文部省唱歌）

ここでは「なに」を「どう」表現するかを課題とし、歌詞の内容や曲想と関連付けながら、技能面から歌唱表現をどう工夫して変えられるかを体験した。「弾んだ感じ」「なめらかに」「フレーズのまとまり」「強弱の変化」「歌詞の表情」など、曲想や歌詞の内容を表現するために、技能や音楽の要素や形式についての理解が必要であることを認識した。

## 3) 「思いや意図をもって」歌う 2—歌詞の内容に共感する—

- ① コンテキストの共有

取り上げた曲 ♪ビリーブ（杉本竜一・詞曲）

「ビリーブ」を取り上げ、なぜこの曲が愛唱されるのかという問題提起に対して、音楽的な構造と歌詞の内容から考察した。そして、「思いや意図をもって歌う」ためには歌詞の内容に共感すること、そのためにはコンテキスト（表現内容の解釈、状況や背景など）を共有することの大切さを理解した。

### (3) 鑑賞活動を例に

鑑賞による活動では次の①と②の課題に取り組んだ。

- ① 聴いて感じ取った内容を表現する（絵図、ことば、記号…を使って）
- ② 感じ取った内容と、音楽を形づくっている要素やその働きとの関連を図る（なぜそう感じたか）



[ワークシートA] の実際の記述例

- ①これからある曲を鑑賞します。この曲を聴いて感じ取ったことを下の枠内に自由に書いてください。表現方法は、ことば、記号、絵図など適宜選んでください。

- ② a 枠内に書いた (描いた) 内容を b 音楽の要素や働きと関連付けてください。b を枠外に書き出し、→ を使って a と結んでください。

感じ取られた内容は、楽器の音色や奏法、音形 (メロディーライン、分散和音)、音の高さ、ハーモニーや調、強弱、テンポの変化などと結びつけられていることが分かる。概して受講者の反応は、曲を繰り返し聴きながら①の課題に対しては自由に、積極的に書く (描く) ことができたが、②の課題では鳴り響く音楽から何かを認知していながら、その対象を言葉で的確に表現することが難しかったようである。実際には使われていない楽器名が挙げられたり、用語などが間違っ使用されたりした例もあり、説明に苦慮する様子が見られた。

この鑑賞活動は「思いや意図」を通して聴いて感じた内容を、音楽の固有性とどう結びつけられるかを体験するものであった。音楽がもつ固有性と言語を結びつけるためには、必ずしも専門用語を習得していることが必須条件ではないと考えるが、専門用語に代わる言葉を使って認知した内容を表現し、伝えることができるかが問われていた。たとえば「スタッカート」「アルペジオ」「半音階的進行」という言葉を知らなくても、それらを認知したときにそれを特定する言葉が使えるか、また楽器の名称を知らなくても、曲を特徴づけているその音色を、言葉で表現できるかということが問題である。この問題は、表現と鑑賞の両領域において、子どもたちが、発達段階に即してどのような言語活動を促進させるかという課題と関わっている。同時にその言語活動は、子どもたちの「思いや意図」を伝える上で重要な役割を担っている。さらにこの鑑賞における言語活動は、表現活動においても生かされるよう2つの領域で関連を図っていく必要があるだろう。

### 3. 表現実践 (午後の部) —身体と音・音楽による表現—

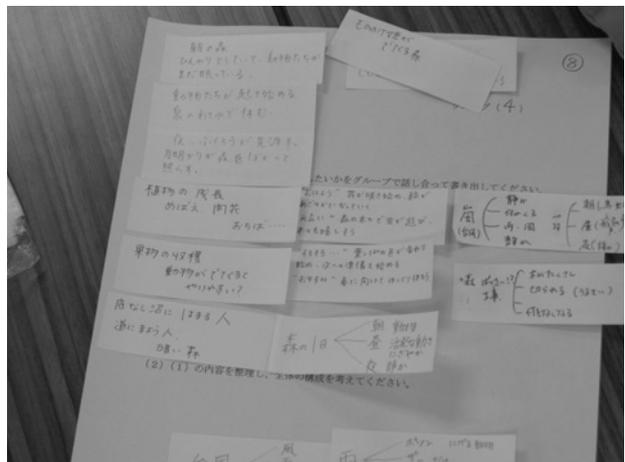
午後の研修はグループに分かれて活動した。題材<森>を活動の手順に従って「身体」と「音・音楽」で表現するという課題に取り組んだ。

○活動の手順

- (1) 題材について「なに」(感情、筋書き、情景など)を表現する・したいかを話し合い、書き留める。  
[ワークシートB(1)](意識的に「思い」を伝え合う段階)
- (2) (1)の内容を整理し、全体の構成を考える。[ワークシートB(2)](「思い」をグループで共有する段階)
- (3) (2)の内容を「何を使って」「どのように」表現するかを書き込む。[ワークシートC](表現への「意図」を認識する段階)…「身体」「音・音楽」別々に作業を進める。
- (4) (2)と(3)の構成内容の表現を試みる。(「思い」が「意図」によって表現される段階)…「身体」「音・音楽」別々に表現をつくる。適宜、持ち寄った素材、道具、楽器などを活用する。  
※(3)と(4)の作業は同時進行してもよい。
- (5) 各グループの実演発表…先に「身体」、つづいて「音・音楽」による表現。(表現して伝える段階)



グループでの話し合い



〔ワークシートB〕の実例

1班5人で5つのグループに分かれて活動したが、その中から第3グループを例に、話し合いから構想、実演の経緯をたどっていく。

〔ワークシートB〕(第3グループのものを筆者が転記)

- (1) 表現内容：何を表現するか・したいかをグループで話し合って書き出してください。

冬→春へ

森の成長 (子ども→大人)

森の夜明け (夜→朝)

森→破滅→復活

天候の変化 (晴れ→曇り→嵐→晴れ)

- (2) (1)の内容を整理し、全体の構成を考えてください。

I. 平和な森 [静]

II. 森の危機 [動]

III. 復活 [静]

(木：4本 鳥：1羽)

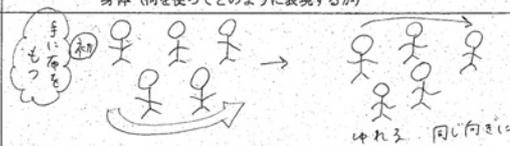
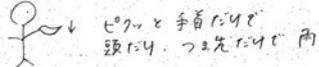
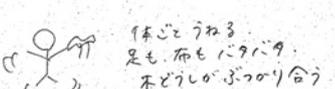
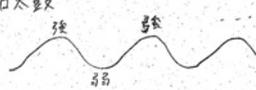
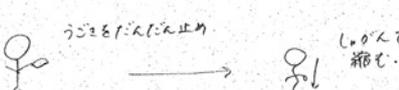
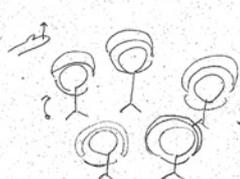
[ワークシートC] (第3グループのものを筆者が転記)

(3) 下の表の「表現内容」の欄に(2)の内容の項目を挙げ、「身体」「音・音楽」でそれぞれどのように表現するかを書き込んでください。

表現内容	身体 (何を使ってどのように表現するか)	音・音楽 (何を使ってどのように表現するか)
平和な森	④風船と体全体を使って、穏やかな風と木を表す。 ⑤布を羽に見せて、小走りに走って楽しい森の生活を表す。	ミニマラカスを優しくまわす。カスタネットを小さく鳴らしたり、大きく鳴らしたりする。団扇の根元(ギザギザ)を串でこする。ミニオカリナで高い音を出す。トライアングルで優しく音を出す。
危機	④腕を小刻みに震わせて端の木から順番に倒れる。	タンバリンを強くたたく。 ドン  ピアノの低い音。
(破滅)	⑤布を取り、首に手をかけて苦しみを表す。	箱に入れたビー玉を鳴らす。
再生 (平和な森)	④一人一人が体を低い位置から回転しながら高く伸び上がる。 ⑤徐々に体を起しはじめ、軽快に走りまわる。	フィンガーシンバル ↓ (平和な森と同じ)

([ワークシートC] の実際の記入例、第4グループのもの)

(3) 下の表の「表現内容」の欄に(2)の内容の項目を挙げ、「身体」「音・音楽」でそれぞれどのように表現するかを書き込んでください。

表現内容	身体 (何を使ってどのように表現するか)	音・音楽 (何を使ってどのように表現するか)
① だんだん風が強くなる	 手ももも ゆれる 同じ向きに	① 口笛 マラカス(筒の) ↓ マラカス
② 雨がぱらぱら降り始める	 ピョコと手首バヤで 頭バヤ。つま先バヤで 雨	② <del>フィンガーシンバル</del> 和太鼓
③ 風も雨も強くなる。嵐の真っ最中	 体がこねる 足も。布もバタバタ。 木どうしがぶつかり合う	③ 太鼓 ドラム タンバリン 和太鼓 → だんだん小さく太鼓 
④ だんだん風と雨がやむ	 うごきをだんだん止め。 しおんぞろも。	④ 鈴 鈴琴。ハーモニカ
⑤ 穏やかに晴れる。	 2人 立て。 3人 立て。 光が差し込んでくる 感じ	

各グループが表現内容として挙げた項目には、天候・自然などの情景や場面、人物、動物、感情(たとえば恐怖)などがあつた。実演発表はまず身体表現をした後、音・音楽の表現に移つた。発表者が、表現内容についてどのような感覚や感情、イメージを持ち、それをどう表現していくのかという課題は、「思い」→「意図」→「表現」のプロセスを体験することであり、それは同時に、表現のための材料、方法を精選していく過程でもある。2時間という限られた時間ではあつたが、グループ内で<森>からイメージすること(思い)、<森>について何をどう表現したいか(意図)について活発に意見が交わされ、様々な試行を重ねながら2つのパフォーマンスを完成させていった。表現のアイデアやイメージを共有し、表現方

法を獲得する上で、言語的コミュニケーションの役割は大きく、またその役割は実演発表が終わった後の話し合いでも確認することができた。「なぜあのような動きをしたのか」「その素材を使ったのはなぜか」「何をどう表現したかったのか」などの質問に、表現者側は答えた。これは表現者の「思いや意図」を確認する場となったが、みる・きく側からはこのような質問をするだけではなく、「自分はこう感じた」「このように解釈した」といった意見も出され、表現と享受の相互的な「思いや意図」の交換ができたことは有意義であった。



音・音楽による表現活動の様子



身体による表現活動の様子

#### 4. 表現実践活動の課題

午後の研修〈表現実践—身体と音・音楽による表現〉を振り返って、3つの観点から考察をすすめる。

##### (1) 指導計画とワークシートの活用について

今回の実践は、話し合いから実演に至るまで2時間という制約の中で計画された。書く時間の確保が難しかったため、用意された3種類のワークシートの記述は簡略化されたようである。ある意味、短時間で集中して活動できたため、ヴァーバルなコミュニケーションが優先され、書き留める必要性は減少してしまったのかもしれない。しかし今回筆者が構想したワークシートは、つくる活動の手順が理解でき、表現者の考えを実現させるためには有効であったと感じている。また、実際の子どもたちの学習活動は数回に分けて計画されるものであるから、話し合ったり、考えたりした内容を記録しておく必要がある。こうしてイメージや考えを言葉にすることで、「思いや意図」を表現に向かって表出していく道筋を生み出すことができるだろう。

##### (2) 身体表現のリテラシー

この実践活動の様子から、参加者は普段から学校現場で様々な身体表現を経験していると推察した。このような活動では表現者がどの程度、身体表現のリテラシーを体得しているかは重要なポイントになるだろう。ともすれば身体は、音楽や図画よりも人間が自由に表現できる道具と考えられるかもしれないが、表現を積み重ねていくためには基礎的な体験や技能が求められる。また、身体表現にもなって様々なマテリアル（道具や素材）が活用されたが、身体そのものとそれらマテリアルとの関連性にも目を向けなければならぬ。身体表現については、今後より専門的に検証していく必要があるだろう。

##### (3) 身体表現から音・音楽による表現への連携

身体や道具を使った表現と音・音楽による表現、この2つの表現実践は有機的に関連させることができたろうか。実演を振り返ると、身体と空間の関連を通して感知し、表現された強弱、遠近、伸縮といっ

たダイナミクスの構造的な要素が、音・音楽による表現に反映されたか、また「身体」と「音・音楽」をそれぞれ固有のものとして捉えて内容を表現しようとしたか、が問われる。今回の実践では「身体」と「音・音楽」を有機的に関連させるのか、あるいはこの2極を対照させることでそれぞれの特徴を捉えるのかを明確にしなかった。現時点ではどちらも意味あることであり、線引きをすべきかどうか判断するには至らない。今後この実践結果をふまえて2つの関連性をさらに精査していきたい。もう一点、どちらの表現にも言えることだが、私たちは日常生活において情報メディアの戦略的な影響を受けているため、それらシンボル化された表現の模倣を避けることは難しいという問題がある。そのようなステレオタイプの表現にとらわれないように、どう指導していくべきかという課題にも取り組まなければならないだろう。

以下は最後に参加者が討議2に答えて記述した内容である。

#### 討議2

今回の表現実践から感じたこと、学んだこと、それを今後子どもたちの学習にどう生かしていくか  
(感想等も含めて自由記述)

- ・「森」というテーマを与えられた時、どのように表現すればよいか、表現するためにはどのような工夫をすればよいかということを中心に考えさせられ、考えるうちに思いや意図がともなってきたように思う。
- ・はじめは難しいと思った身体表現や音楽づくりの活動であったが、話し合っていく中でどんどんイメージが広がり、完成させることができた。子どもたちも同じように、他者の意見を聞きながら考えることで自分の中のイメージも広がって、より活動内容を深めていけると思った。
- ・表現活動はイメージの共有が大切だと感じた。グループの活動を通してより具体的に考えていくことで、新しい発見や可能性が広がると実感した。また、見ている側に伝えることの難しさを学ぶと同時に、受け取る側に新しい解釈をしてもらえる楽しさもあることがわかった。
- ・「森」を思い浮かべ、聞こえてくる音などを想像する時間が多く、思考力がつく活動だと思った。
- ・身の回りのもので何かを表現しようと考え、音楽が苦手であったり、文章や絵がうまくかけなくても、誰もが全力で取り組んで活躍できる内容だった。このような活動で力をつけていけば、歌唱や創作などで「思いや意図をもって表現する」ことはさらに充実するのではないかと思った。
- ・まずは、思いや意図をもたせられるように場を設定し、「表現したい」と思える雰囲気作りに努めたい。
- ・個々の「思いや意図をもって表現する」学習活動から、さらに「コンテキストの共有」に視点を置いた活動に取り組んでいきたい。



発表の様子



討議の場面

### Ⅲ 考察とまとめ

本研修の趣旨は、学習指導要領に示された「思いや意図をもって」の理念を参加者ととも解釈しながら、実践を通して表現指導について問い直すことであった。図1はこの研修で伝えたかった内容を表したものである。

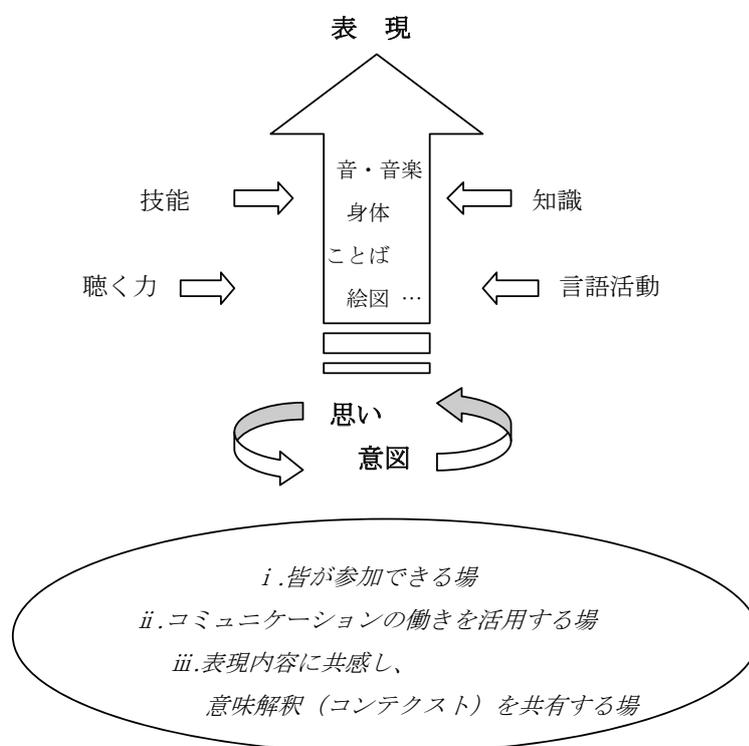


図1 音楽科学習活動における「思いや意図をもって」と表現の相関

音楽科における「思いや意図」は、表現者である子ども一人ひとりを主体として捉えるという強い理念が表わされたものである。主体の「思いや意図」が表出されるとき、表現技能、知識、聴く力、そして言語活動が相互に関連して活用されるだろう。その中で本研究では特に「身体」と「言語」の役割を問い直していきたいと考えている。

#### 1. これまでの研究との関わり

##### —「音楽的体験を共有する場づくり」<sup>3</sup>「イタリアの舞台表現教育」<sup>4</sup>—

子どもと学生たちの表現活動を通しての交流会や、音楽科教育法の指導実践（模擬形式）を支援する立場から、表現者同士が好ましい人間関係を育み、表現内容に共感し、意味解釈（コンテキスト）を共有しながら表現活動が進められるよう、筆者は「場づくり」という視点を大切にしてきた。現実の場であれ、想像された場であれ、何かを感じ取ったりイメージしたりするとき、それらはその場に身を置いているという「身体性」によって捉えられると考えた。上図の底面に示された i ii iii の「場」は、この理念に基づいて実践を試行しながら導き出されたものである。これら3つの「場」は、はじめから「わからない」「難しそう」と思わずに表現の場に参加し、他者との関わりの中でコミュニケーションを図りながら表現活動をするために必要な条件である。子どもたちが表現活動をするとき、活動内容や表現したい内容、また音楽に対して「やってみたい」「おもしろそう」などの気持ちをもって参加することが、「思い」をもって活

動するはじめの段階として大切されるべきである。

一方、「イタリアの舞台表現教育」（テアトロ教育）について実地調査する機会を得て研究を進めているが、このイタリアの教育実践は、本論の研究課題「思いや意図をもって表現する」とまさに重なるものであり、多角的な視野を与えてくれている。子どもたちの感覚や感情、イメージ、想像といった情動をともなう認知や思考を、身体と言葉を使って引き出し、表現へと結実させていく、そのプロセスをどう指導していくかについて認識を新たにするようになった。

## 2. 「身体」との関わって

音楽と身体表現の結びつきは様々な場で実践されてきた。ダルクローズ（É. Jaques-Dalcroze 1865-1950）のメソッドに代表されるように、身体の動きを通して音・音楽を感知することにより、音楽の要素や形式などの理解が促進されることは知られている。しかし今回の研修会の構想では、この音・音楽に反応する「身体」という考え方に依拠するのではなく、むしろ「身体」を「思い」にともなわれる感覚や感情を受け止める主体として位置付けようと考えた。つまり「思いや意図」が音楽表現に向かう前に、「思いや意図」を身体で感知し、その内容を身体で表現することを目的とした。

本論は実践的立場から論考したものであるが、研究を進めていくと身体、認知、情動、現象と関わる諸学の広大な森が広がっていることに目を向けさせられる。一例ではあるが、ヘンルマン・シュミット著の『身体と感情の現象学』<sup>5</sup>は興味深い。まだ一面的にしか理解していないが、この理論から筆者は次のように思索する。

身体という絶対的な場所があるからこそ、相対的な場所としての空間からさまざまな感覚や現象を感知することができるのだろう。たとえば雲が漂っている様をみたり、想像（空想）したりするとき、その様は絶対的な場所である身体を通して感じ取られる。この場合、身体と雲の位置関係は対照しているか、雲が身体そのものとして感知されるのか、さまざまな状態が考えられるだろう。イメージや感覚、そして感情を身体的状態感として人間がとらえているということに真理があるなら、「思いや意図」は身体性をともなって想起されると言えないだろうか。すると「思い」を表現の道具としての身体、音・音楽で表現する場合に、身体性を通して想起された「思い」はどのように表出されるのか。そこには心身の様々な働きや言語、認知と関わる表現の営みがあるだろう。

## 3. 言語活動との関わり

「思いや意図」には様々な感覚やイメージ、感情をともなうが、それら感じられたことが、漠然としたものからより明確なものとして定着するために、言語の役割がある。「どのように」「どれだけ」「なぜ」という問いに自分自身に、あるいは他者に向かって答えるとき、言語活動は、物事の本質や特徴を捉えたり、感じ取ったことの根拠を示したりというように、分析的、構造的な思考力を感性と連動して磨くだろう。このような言語活動が、音楽の理論や技能の習得を通して音楽的能力を継続的に発展させると考える。もちろん音楽の本質をすべて言語で表現できないし、あるいは言語で表現することを意識した結果、音楽の実体から離れてしまう可能性もあるだろう。また日本の美意識における「あわれ」「粹」など、多くを語らずして一言で美的感覚を共有する文化があることも我々は知っている。

しかしこれまで述べてきたように、言語は音楽科の学習活動の展開の中で「思いや意図」を認識し、表出するために不可欠である。言語は、表現や鑑賞といった音楽科固有の学習内容の定着のために、有機的に活用されるべきである。その基礎付けと展開において共通理解を得るために、新しい学習指導要領で[共通事項]が設けられたことは評価される。だが、ここで改めて注意しなければならないのは、音楽は多重構造であり、様々な要素や形式から成り立っているということである。知覚し、認知したことの要因は複合的であるだろうから、的確に対象と要因を結びつけられる場合と、その対象が多面的である場合がある

ので、この点については考慮していかなければならないだろう。たとえば教師が、聴いた音楽から拍子の特徴を子どもに捉えさせようと質問した場合、子どもから「流れるような」や「弾むような」といった答えが返ってくるとする。この時、それら答えは必ずしも拍子だけを認知した結果ではないという可能性があるからである。

ここまで「場」「身体」「言語活動」と関わって「思いや意図をもって」という問題を考察してきたが、これを基に身体、情動、知性と連動しながら美的感性を育む表現教育のあり方を、教育現場の実情に鑑みていま一度問い直したいと考える。

## おわりに

本論の研究目的は、小学校学習指導要領に示された「思いや意図をもって表現する」をどのように指導・実践するか、その方向性を示すことであった。この学習活動は、基礎から学習展開へと計画性をもって進展しなければ、「表現したつもり」というあいまいな体験の集積に終わりがねないだろう。その意味で筆者の実践構想が、批判検討のモデルとなれば幸いである。

本論で扱った研修内容は、小学校の授業でそのまま活用できる実践や指導方法もあるが、むしろ研修の参加者が「思いや意図をもって表現する」という活動に取り組んだ経験を、子どもたちとの関係において生かし、試行しながら新たな指導の方向性を見出してくれることを期待する。

限られた時間の中で、25名の参加者には熱心に実践・討論の活動に取り組んでいただいた。そのエネルギーが実りある結果につながり、新たな課題を見いだすことができた。参加者である教員一人一人が、学校生活全般において子どもとの関わりを大切にされ、思いや表現を受け止めようと努力されている姿勢から多くのことを学ばせていただいた。ここに参加者と、研修指導の機会とご支援をいただいた神奈川県立総合教育センター所長、下山田伸一郎氏、および同専門研修課の指導主事佐藤りか氏に御礼申し上げ、今後本研究をさらに発展させたいと考えている。

## 注

<sup>1</sup> 文部科学省（2008）pp.8 - 9

<sup>2</sup> 中嶋（2009）筆者が研修会で実践した具体的な歌唱指導の内容・方法の詳細について参照されたし。

<sup>3</sup> 中嶋（2007）

<sup>4</sup> 中嶋（2010）

<sup>5</sup> シュミッツ（1986）

## 引用文献

H. シュミッツ (1986) 『身体と感情の現象学』小川 侃編、産業図書

中嶋俊夫 (2007) 「音楽的体験を共有する場づくりへのアプローチ —初等音楽科教育法授業における学生の取り組みと意識調査を通して」『横浜国立大学教育人間科学部研究紀要 I』教育学 第 9 集 pp.119 - 137

中嶋俊夫 (2010) 「イタリアの舞台表現教育の動向と創意 —ロンバルディア州ミラノ県の取り組みを中心に」『横浜国立大学教育人間科学部研究紀要 I』教育学 第 12 集 pp.119 - 134

中嶋俊夫 (2009) 「Ⅲ音楽科指導のポイント 1. 歌唱指導のポイント」『小学校音楽科教育法』宮野・本多編、教育出版、pp.88 - 96

文部科学省 (2008) 『小学校学習指導要領解説 音楽編』教育芸術社

## 参考文献

Bottero,E., Padovani,A. (2000) *Pedagogia della musica*, GUERINI STUDIO,Milano.

佐藤学・今井康雄 [編] (2003) 『子どもたちの創造力を育む—アート教育の思想と実践』東京大学出版会

藤田和生 [編] (2007) 『感情科学』京都大学学術出版会

N. ランド (2006) 『言語と思考』若林・細井訳、新曜社